

# 分担研究報告

## (1)MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査

研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究協力者：野坂 祐子(大阪大学大学院)

山口 正純(武南病院)

林 神奈(University of British Columbia)

藤田 彩子(東京大学大学院)

大島 岳(一橋大学大学院)

三輪 岳史(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

大槻 知子(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

### 研 究 要 旨

これまでの HIV 陽性の MSM (男性とセックスを行う男性 /Men who have Sex with Men)を対象にした研究から、MSM の薬物使用と性行動には密接なつながりがあり(生島ら, 2013)、ハッテン場やゲイ向けクラブ等での薬物の販売や使用を目撃したり、セックスの相手から勧められたりしたことがきっかけとなって、薬物使用が開始される場合があることが確認されている(生島ら, 2014)。また、薬物の使用の開始時期は感染判明前であることが明らかになっている(若林ら, 2015)。本研究では、広く MSM が出会いや交流を目的に利用するゲイスポット(ハッテン場やクラブ)や web ツールの利用者にターゲットを絞った調査を行うことで、MSM の性行動や薬物使用状況を把握することをめざす。そこで、次年度に実施を計画している MSM を対象とした質問紙調査に向けた予備調査として、ゲイスポット関係者などへの質問紙調査(モニター調査)とインタビュー調査を実施した。主に、MSM の薬物使用の状況やその目的等について聞き取りを行い、さらに作成中の質問票について、所要時間、項目の明瞭さ、追加修正すべき項目等を確認した。

結果、対象者は 30～50 代の MSM14 名であった。全員がこれまでに何らかの薬物を使用した経験を有していた。また、全員が他者の薬物使用場面を目撃した経験を持ち、ほとんどが他者から薬物使用を勧められた経験があった。薬物の使用状況は、「セックスのとき」が 14 名中 13 名であり、1 名は「クラブ」での使用であった。薬物使用の理由について、性的な快感を高めるためという意見が多くあげられたものの、その背景には、精神的不安や苦痛に対処したり、相手を満足させることで関係性を維持したりするといったニーズの存在が示された。クラブでの使用も音楽の快感を高めるためという語りと共に、仲間との親密さを深めるためという関係性に関するニーズが見出された。一方、薬物を使わない理由には、危険性や違法性が多くあげられたが、違法性の基準は、時期や使用場所(国)によって異なるという流動性があり、場所が変われば社会規範も変わり、薬物使用に影響を及ぼしていた。また、薬物を使わない理由には、良好な QOL といった生活の満足度や、意思やモラルの強さ、知識といった個人的な特性があげられた。他者との信頼関係は、薬物使用を抑制する要因として考えられていた。

MSM においては、一つの要因のみで薬物使用の可能性が生じるのではなく、それまでの生育環境を含む生活の状況が精神的健康や対人関係のありように影響し、薬物が身近にある場に接近することで薬物へのアクセシビリティが高まり、その結果、性的場面や性的関係性において薬物の使用を誘われやすくなる。こうした重複リスクに着目し、分岐点となりうる各リスクに介入することが必要と考えられた。

## A 研究目的

MSMにおける薬物使用の背景の一つには、偏見と排除による孤立があり、薬物使用と性行動が密接なつながりがあることが示されている(生島ら, 2013)。薬物使用のきっかけとして、MSMがセックスの相手を探す、人間関係を広げる際などに利用するハッテン場やクラブ等で薬物の販売場面や他者の使用場面を目撃したり、セックスの相手から勧められたりしたことがあげられており(生島ら, 2014)、MSMにおいて薬物使用は出会いや性的場面や性的関係性と重複する傾向があることが確認された。また、ブロック拠点病院を中心に実施されたHIV陽性者対象の質問紙調査(n=1,024)の結果からは、「脱法ドラッグ/ラッシュ」の使用については、回答者の4割以上が過去に使用経験があり、そのうちの約8割が感染判明前であった(若林ら, 2014)。

これをふまえ、本研究では、ゲイスポットを利用するMSMにターゲットを絞った調査を行う。

次年度に実施を計画しているMSMを対象とした質問紙調査(1,000名程度)では、HIVステイタスや薬物使用経験を問わず、東京都内のゲイスポット(ハッテン場、ゲイ向けクラブ、SNS等)やwebツール(出会い系アプリ)を利用するMSMを対象に、性行動や薬物使用等の実態を把握する予定である。

本研究は、その予備調査の一環として行われたものであり、ゲイスポットに関わりのあるMSMを対象とした質問紙調査(モニター調査)とインタビュー調査を実施した。主に、MSMの薬物使用の状況やその目的等についての聞き取りにより質的データを収集することが目的であり、さらに作成中の質問票について、所要時間、項目の明瞭さ、追加修正すべき項目等を確認することも目的とした。

## B 研究方法

### 1. 調査協力者の選定

来年度に実施する質問紙調査の予備調査のために、ゲイスポットに関わるMSMの協力を得た。

研究協力者の募集にあたっては、NPO法人ふれいす東京の支援資源ネットワークを通じて、関係性が構築された他の支援者等による紹介及び本人への直接依頼を行った。

### 2. インタビューの実施方法

個別面接によって、モニターとして作成中の質問紙調査に回答してもらい、その後、記入内容に関するヒアリングとインタビュー調査を行った。回答後のインタビューでは自己の経験や感想のみならず、周囲の経験や感想も含めてヒアリングを行った。

調査に際しては、事前に調査の目的や誓約事項等について書面を以て説明し、同意が得られた場合には同意書への署名を得た。

質問紙調査は、対象者の属性(性的指向、婚姻/パートナーシップの状況と希望等)、ゲイ男性との交流(初体験、交際経験、友人関係、ゲイスポットの利用等)、性行動(過去6ヶ月以内にした性行為、アナルセックスの状況とコンドーム使用の有無、性行為の人数等)、性的関心に対する行動傾向、HIVのイメージや知識、薬物使用(薬物のイメージ、使用する他者の目的や他者から勧められた経験、最近の使用時期と使用した薬物、最初に使用した年齢・場所・相手・状況等)、司法機関の関与(職務質問、逮捕の経験等)、相談(内容と相談対象、ストレス対処法)、被害体験(トラウマ体験)、HIV(受検の有無、結果、時期、理由、PrEPに関する知識と希望、HIVに関する知識等)、MSMとしての自己評価、カミングアウト、性的欲望に関する尺度、メンタルヘルス等からなる。

調査時間は、1人約60分間であり、調査者はHIV陽性者への支援実践を有する研究者2名であり、記録者が陪席した。

調査期間は、2015年12月の2日間であった。

### 3. 分析方法

質問紙調査へのモニター回答について、ヒアリング内容を筆記にて記録するとともに、回答データも数値化し、基礎データとした。

筆記記録は、質問票の改訂に反映させ、薬物使用に関する状況についての分析にも用いた。

### 4. 倫理的配慮

調査実施に関しては、NPO 法人ぷれいす東京倫理委員会にて審査を受けた。調査協力者の健康への配慮と個人情報の守秘を誓約した。

## 結果

### 1. 対象者の属性

調査対象者は、MSM14名であり、年代は30代7名、40代6名、50代1名であった。

### 2. HIV抗体検査の受検状況と結果

対象者14名全員が、HIV抗体検査の受検経験を有し、結果は8名が陽性、5名が陰性(1名が無記入)であった。

### 3. 性行動について

「過去6ヶ月間のアナルセックス」の体験者は9名であった。

### 4. 薬物使用について

#### (1)身近な人の薬物使用の経験

対象者14名全員が、「これまでに他者が薬物を使用している場面を目撃した経験」を有し、「他者から薬物使用を勧められた経験」がある人は12名、「セックスの時に薬物を使用した経験」がある人は13名であった。

#### (2)最初の薬物使用の時期と場所

最近の薬物使用について、「1年以上前」に使った人が最も多く10名であり、「7～12ヶ月前」に使った人が1名、「この3ヶ月間」に使った人が2名であった。

「初めて薬物を使った年齢」は、平均21.8(±6.04)歳であった。

「初めて薬物を使用した場所」について、質問紙の項目では「ハッテン場」が5名であったが、「その他」として「相手の家(友人の家)」をあげた人が5名、「ラブホ」が1名であった。

### (3)薬物使用の理由

薬物を使用する理由として最も多くあげられたのが、「快樂・快感」であり、セックスの感度や興奮を高めたり、アナルセックスの痛みを軽減させたりするために使用していた。セックスのために薬物を使う理由として、ほかには、普段とは異なる特別なセックスをするアトラクション性や、長時間(1～2日間)にわたってセックスをするためといったことも使用理由にあげられた。

こうした性的刺激を高めるために薬物を使用する背景には、セックスに没入して現実逃避をして、精神的不安を軽減させたり、孤独感をなくしたりするニーズ(必要性)があることが語られた。日常生活において仕事が決まらないといったような不安や焦りを和らげるといふ、精神的苦痛に対処するために薬物を使用する人が複数名いた。「暗がり複数でのセックス」をすることで、孤立感を軽減させようとする人もいた。

同じく、性的刺激を求めて薬物を使用する人のなかには、自分の快感よりも相手の快感や満足を高めることを目的にしていた人もいた。薬物使用により勃起を持続させたり、刺激によってマンネリ化を防いだりすることで、セックスの相手を満足させようとするものであり、これらは「セックスの不安への対処や性的関係性の維持」のために薬物を使用しているといえた。

ほかに、他者から勧められたり、情報を得たりしたことによる「興味・好奇心」や、海外で遊ぶうえでの「マナー」と捉えて薬物使用を開始したという理由もあった。

このように、薬物使用においては、セックスでの使用を主とする理由が多くあげられたが、「音楽の感度を高める」といったクラブでの使用目的もあげられた。

クラブでの使用は、性的目的よりも音楽や映像を楽しむことを主とした理由が多かったが、クラブでの出会いの際に、魅力的な相手に勧められた

ときに「親密になるため」といった関係性を深めることがニーズとしてあることが示された。

#### (4)薬物不使用の理由

薬物を使わない理由についても尋ねた。本調査の対象者は、全員薬物を使用した経験があったため、ここでの回答は薬物の未使用者による「使わない理由」ではなく、再使用をしない理由として捉えられる。また、対象者が、未使用者の使わない理由を想定して回答した意見も含まれている。

まず、薬物を使わない理由として、薬物の「危険性」をあげる人が複数いた。薬物そのものへ依存してしまうことへの不安や恐怖、薬物のネガティブなイメージ、死に至る可能性などによる危険性を理由としたものであった。こうした薬物の危険性や恐怖は、使用者を間近に目撃した経験から生じていた。薬物使用者の異変(様子がおかしくなる)や逮捕されるといった状況を目の当たりにしたことが、薬物使用回避の理由となっていたようだった。

また、薬物不使用の理由として、「違法性」をあげる人も複数いた。しかしながら、薬物不使用の理由としてあげられた「違法性」に関しては、国による法体系の違いにより、国外での使用は「合法」である判断から使用理由に転じるものでもあった。国内での薬物使用の可能性についても、薬物に関する規制の状況を意識して使用を判断していた人が複数名いた。

このほか、薬物を使わない理由として、「現状の生活に満足している」「薬物を使わないセックスに満足できている」といったその人自身のQOL(日常生活と性生活)の満足度が影響しているという意見や、「意思の強さ」「モラルの高さ」といった意識や態度、「正しい情報や教育を得ている」といった知識といった、個人的要因もあげられた。

さらに、薬物を使用することで仕事や日常での周囲の信用を失ったり、人間関係を壊したりするという「他者と信頼関係」を理由にあげた人も複数名いた。

## 5. 質問票項目の内容や構成について

### (1)回答にかかる時間と分量

本調査は、実際に実施する web 調査とは異なり、調査用紙に筆記にて回答する方式で行った。

作成中の質問票に対する回答時間の平均は、22分(範囲 15～40分)であった。

回答者の主観的負担感にはばらつきがあり、「長かった・多かった」と感じた人と「ふつう・問題ない」と感じた人がいた。

### (2)構成や項目に関する検討

全体の構成として、HIV ステータスによって回答の仕方が異なる箇所などが判明した。

また、質問項目において、「セックス」の定義が不明瞭であるといった問題が把握されるなど、より明確化すべき箇所も見出された。

さらに、薬物の不使用の理由として「違法性」が多くあげられたが、外国での使用は違法性がないものと判断され、薬物使用に関する抵抗感を下げることが示唆された。こうした社会や文化的文脈も考慮した質問項目に改訂する必要性が明らかになった。

### (3)実施方法の検討

ゲイ向けスポットや web ツールでの調査実施を円滑に行うため、ゲイ向けスポットの関係者から有効な実施方法やインセンティブのあり方についてヒアリングを行った。

## D 考察

次年度に実施するゲイスポットにおける web 調査のための予備調査として、ゲイスポットの関係者である MSM14 名を対象に、質問紙調査の試行とインタビュー調査を実施した。

結果、30～50代の MSM のうち、HIV 陽性の人は 8 名、陰性の人は 5 名(無記入 1 名)であり、全員がこれまでに何らかの薬物を使用していた、薬物の最終使用時期が「1年以上前」である人が多くを占めたが、1年以内の使用者もいた。

また、全員が他者の薬物使用場面を目撃した経験を有しており、ほとんどが他者から薬物使用を勧め

られた経験もあった。対象者においては、薬物は身近なものとして体験されていたことから、薬物の「身近さ」と薬物を実際に使用することには、関連がある可能性が示唆された。30～40代を主とした今回の対象者においては、薬物使用を開始した年齢は21.8歳であったが、対象者の年代や危険ドラッグの流通状況によって、異なる特徴があるのではないかと考えられた。10～20代の若年層のMSMにおいては、薬物の使用開始年齢はより早期化する可能性が見込まれた。

本調査の対象者において、薬物の使用状況は「セックスのとき」が14名中13名であったこともあり、薬物使用の理由についても性的な快感を高めるためという意見が多くあげられた。これまでのHIV陽性者を対象にした研究結果からも、MSMの薬物使用と性行動は密接な関連が示されており、本調査においても同様の傾向がみられた。性的な没入を目的としたセックス場面での薬物使用は、感覚や感情を調整したり、他者との関係性の操作やアイデンティティの変容といったさまざまなコントロールの手段として用いられていることが指摘されているが(生島ら, 2014)、本研究においても同様に、精神的不安や苦痛に対処したり、相手を満足させることで関係性を維持したりするといったニーズの存在が示された。

クラブでの使用も同様に、音楽や映像を楽しむという理由のほかに、相手との親密さを深めるためと関係性に関するニーズがあることが伺えた。

一方、薬物を使わない理由には、危険性や違法性が多くあげられた。他の人の使用場面の目撃は、上述したように薬物使用のきっかけの一つであったが、薬物使用による心身への悪影響や逮捕を目の当たりにすることは、薬物の使用を抑制する要因にもなっていた。

複数の人が薬物の使用の是非を違法性の観点から述べており、対象者にとって違法/合法の基準は強く意識されていた。しかし、その基準は時期や使用場所(国)によって異なるという流動性のあるものであるため、身を置く場所が変われば、場の規範も変わるという特徴があることが示された。

また、薬物を使わない理由には、良好なQOLといった生活の満足度や、意思やモラルの強さ、知識

といった個人的な特性があげられた。仕事や日常における他者との信頼関係も人とのつながりも、薬物使用を抑制する要因として考えられていた。

このように、薬物の使用と不使用に関する質問紙調査及びインタビュー調査からは、MSM集団において薬物は性的場面で用いられやすいものの、性的快感を得るといった目的の背景には、精神的健康(不安や苦痛の軽減)や人とのつながりという関係性が影響しており、それが薬物使用を促進したり、抑制したりする可能性が示唆された。

一つの要因のみで薬物使用の可能性が生じるのではなく、それまでの生育環境を含む生活の状況が精神的健康や対人関係のありように影響し、薬物が身近にある場に接近することで薬物へのアクセシビリティが高まり、その結果、性的場面や性的関係性において薬物の使用を誘われやすくなる。こうした複数の小さな要因が重なることで、薬物使用のリスクが高まる状況を「まるで運のように」と表現した対象者もいた。

MSMの薬物使用においては、こうした重複リスクに着目し、分岐点となりうる各リスクに介入することが必要と考えられた。精神的健康の状態に影響を与えるMSMの生育上の困難さ(「男らしくない」などジェンダーやセクシュアリティを理由とした虐待やいじめ、性被害体験など)や、幼少期からの関係性の体験様式(親子関係における被虐待体験、思春期以降の同性集団からの疎外や自己の性的指向の葛藤やカミングアウト体験、成人期における同性パートナーとのDV関係など)に注目することで、MSMにとっての薬物使用の特徴が明らかにできると考えられる。

今回の調査で対象とした東京都内のゲイスポットには、性的指向を開示せずに生活してきた地方出身の利用者もいる。性的な出会いの場において、相手に合わせてセーフアセックスができなかったり、集団内の力関係(ヒエラルキー)の上位に立つために薬物を一緒に使用して「仲間」になろうとしたりする人もいるとのことだった。また、SNSなどネット上のコミュニティ内で注目を集めることで自己評価を高めようとし、フォロワーを増やすことでネットワークを広めるといったバーチャル空間に特有の関係性の取り方も指摘された。

MSM にとって、ゲイスポットやネット上の関係性は、サポート資源となりうる反面、リスクのある性行動や薬物使用にもつながりやすい。次年度、ゲイスポットにおける量的調査を行うことで、そうした場を利用する MSM における薬物使用の分岐点となる要因を明らかにしていきたい。

また、本研究では、作成中の質問紙調査の所要時間や項目の明瞭さ、追加修正すべき項目等の確認を行い、新たに追加する回答選択肢を抽出した。モニター調査として用いた質問紙への記入と本調査での web 入力では、回答のしやすさに違いがみられると考えられるが、回収率を高めるにはより短時間で実施可能な分量に修正する必要があると考えられる。現在、web 調査のための改訂版の質問票を作成中である。

## E 本研究の限界と今後の課題

本研究は、次年度の質問紙調査の予備調査として行われたものであり、作成中の質問票への回答やヒアリングをもとにした分析である。また、対象者もゲイスポットの関係者に限られる。これらの理由から、本研究で得られた結果や考察は、MSM の薬物使用の状況を広く把握したうえのものではない。とくに、今回の対象者は全員、薬物使用の経験を有していたことから、次年度調査の対象に含まれる薬物不使用者の状況を参照する資料がないことについて、留意が必要であろう。

しかし、ゲイ向けスポットの関係者を対象としたデータは、MSM と薬物との関連をみるうえで貴重な資料であり、MSM のニーズを把握する際に有益な視点が見られたと考えられる。

次年度の質問紙調査の実施に向けた準備を継続することが今後の課題である。

## F 研究発表

(和文)

1. 生島嗣：HIV 陽性者支援の現場から～ MSM (男性とセックスをする男性)への支援を中心に。この科学 186 号 .52-56, 2016.
2. 生島嗣：信じて自分の秘密を打ち明けることから変化は始まった。季刊セクシュアリティ 70 号 .56-61, 2015.
3. 生島嗣：12 月 1 日のエイズデーに HIV/ エイズへの理解を深めよう。ひょうご人権ジャーナル「きずな」11 月号。兵庫県人権協会 .7, 2015.
4. 生島嗣：HIV・HIV 感染症一正しく知って、偏見のない社会を。いろいろな性、いろいろな生き方。ポプラ社 .62-63, 2015.

(口頭発表・国内)

1. 生島嗣、牧原信也、福原寿弥。NPO による対面相談のニーズとその対応に関する考察。日本エイズ学会、2015 年、東京。
2. 野坂祐子、生島嗣。薬物使用経験のある HIV 陽性 MSM の心理社会的要因—生態モデルによる分析から—。日本エイズ学会、2015 年、東京。
3. 佐藤郁夫、加藤力也、生島嗣。HIV 陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察。日本エイズ学会、2015 年、東京。

## G 参考文献

1. 若林チヒロ、生島嗣他：HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成 25 年度総括・分担研究報告書。地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究、39-96, 2014.
2. 嶋根卓也、日高庸晴他：インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究 -REACH Online 2011-, 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成 24 年度総括・分担研究報告書。HIV 感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究。127-249, 2012.